

ました。俺は用があつて、受賞連絡の日は千葉県の津田沼の社員寮にいたんです。洗濯やつてれば縁起がいいかなと思つて、やりたくもないのに洗濯をやつた。そしたら電話が来たんです。

落ちて電話があるっていうし、さすがに受賞者は俺じゃねえだろ、そう思いながら出たら、芥川賞受賞の連絡だった。すぐに第一ホテルってここにきて、来て言われて、俺はそのとき怒つてね。「ここがどこかわかつてんの？ 千葉県の津田沼だぞ。電車なんかもうねえよ」と。そしてたら向こうが笑いながら、「タクシー代くらい出しますよ」と。

タクシーで一時間くらいかかったのかな。着いてみたら、ホテルの入口は黒山の人だかり。誰も俺が受賞者だと思つてないから、人が邪魔で建物の中に入っていけないの。

受賞者なのに(笑)。

丸 担当編集者の「丸山さん、こつち、こつち」という声で、周りが「こいつか!」とびつくりした顔をしてた。

編 当時最年少ですしね。丸 その担当者もいかげんな野郎で、それまでは芥川賞候補になつても、「あんたは付け足し。文學界新人賞を取ればみんな候補になるんだから」って俺に言つた。実際、他に本命

の人がいたんです。阪田寛夫っていうずっと年配の人で、『音楽入門』つてのを書いたの。本人も自分が本命だと自覚してたから、当日は床屋に行つてきてた。

丸 準備されてたんですね。編 それも、いざ蓋を開けてみたら俺だった。後から聞いた話だと、派閥があつて、みんな自分の派閥の弟子に賞を取らせたいわけ。その力関係のバランスが崩れたところに、選考委員の誰かが、「阪田が何十年も書いてきてこれか。丸山は一作目でこれだぞ」と言つて、俺に決まつたらしい。編 文学賞に派閥ですか。丸 ええ。それに、あれほど、お前なんか運だけだ。付け足しだと言つてた担当者、今度は手のひら返しのように原稿頼みに来たん

来たんです。なんと講演をやつてくれないかという提案。俺の学生時代を知らなかつたんだね。それで、俺がどれだけ悪い学生だつたか、話をして聞かせたわけ。だけど、「それは昔の話だから、ぜひ来てもらいたい」と頼まれてました。編 学校側としては素晴らしい卒業生ですよのね。丸 その頃、仙台と同じ十三期生の友だちがいました。そいつはやくざ。その夕チから電話が来て、今度講演をやりに行くんだつて教えたから、「じゃあ、俺も行くわ」と言われて、「それだけはやめてくれ」と懇願しました(笑)。

丸 目立つちやいますよね。丸 あれだけ言つたのに、結局、講演の日にそいつが来たんです。ペンツ五台

文壇への失望 編 デビュー作で大きな賞を受賞されて、その後の心境などはいかがでしたか? 丸 勝手にイメージしてたんだけど、「文壇」つていうのは、切磋琢磨していかなくやらない厳しい世界で、自分なんかが入つちやいけない世界だ、すぐにや

いと気が持ちました。年収が四十万くらいだったから、家賃が月二千元ちよつとの村営住宅を借りて、細々とやつてた。そのうちだんだんと先輩たちのやつてるのを見て、「ああいいいかげんでいいんだ。俺もいいかげんでいいや。固くやることはねえな」と思つてくれちゃつたわけ。それから、色々つまらない仕事に手を出したり、自分のチームを持って、オートバイと四輪駆動車で世界中を飛び回るような仕事もしました。そしたら、大赤字出しちゃつてね。その穴埋めしないといけねえなと思つて、俺、カメラのコーマシヤルにも出たの。

丸 オリンパス。コーマシヤルを撮影するのに、今の

## 「お前の文章は一行見りや誰だつてわかるはずだ」 ——俺は兄貴のその言葉を生きがいにしているんです。

### 母校での講演会

丸 芥川賞をとつた後、俺が通つた仙台の学校から呼ばれたんです。卒業する時なんて、卒業証書を受け取りに行つたら、若い女の事務員に、「ああ、丸山さんね」って机越しに卒業証書を投げてよこされたぐらいですよ(笑)。それが、芥川賞をとつた後に行つたら、校長室で表彰状を渡された。露骨なものだなと思つたね。

丸 それからは学校とは関わりもなく、同窓会すら出たこともなかつたんだけど、受賞から数年経つて、今度は校長と学部長と生徒会長、事務員の四人が自宅に

来たんです。なんと講演をやつてくれないかという提案。俺の学生時代を知らなかつたんだね。それで、俺がどれだけ悪い学生だつたか、話をして聞かせたわけ。だけど、「それは昔の話だから、ぜひ来てもらいたい」と頼まれてました。編 学校側としては素晴らしい卒業生ですよのね。丸 その頃、仙台と同じ十三期生の友だちがいました。そいつはやくざ。その夕チから電話が来て、今度講演をやりに行くんだつて教えたから、「じゃあ、俺も行くわ」と言われて、「それだけはやめてくれ」と懇願しました(笑)。

丸 目立つちやいますよね。丸 あれだけ言つたのに、結局、講演の日にそいつが来たんです。ペンツ五台

丸 文壇への失望 編 デビュー作で大きな賞を受賞されて、その後の心境などはいかがでしたか? 丸 勝手にイメージしてたんだけど、「文壇」つていうのは、切磋琢磨していかなくやらない厳しい世界で、自分なんかが入つちやいけない世界だ、すぐにや

丸 オリンパス。コーマシヤルを撮影するのに、今の

丸 兄貴はものすごい文学が好きで、日本文学を軽蔑してる。ホーフマンスタールの『騎兵隊物語』という短編を、読んでみると薦めてくれたのも兄貴です。「おお、こんなレベルがあるんだ」と衝撃を受けた。ホイットマンの詩の『草の葉』も薦めてくれた。翻訳をして減衰しているはずなのに、これほどの内容なのかと驚きました。

丸 俺の目指すべき文学は、その時にばしつと決まつた。日本文学にはほとんど目を向けずに、こつちの方向へにじり寄つて、いつかはそのレベルに達しようと思ひました。

丸 横道にいろいろそれたけど、四十歳近くなつてから、これはちゃんとやらなきゃいかんと思ひ直した。その当時はくだらない仕事を荒稼ぎしてた頃だったから、かみさんにこれから食えなくなるけどいいなと言つたら、彼女は全然構わないと言つてくれた。

丸 それからは地道にやつて、『千日の瑠璃』を書いた。そのあたりで、あいつはただオートバイで走り回つてる野郎じゃないんだなという認識が、少しずつ広がつたのかもしれない。

丸 (次号につづく)

【後記】 本インタビューは、二〇一八年五月に弊社一同で丸山健二氏のご自宅を訪問した際の内容だ。意外に思われる方もいるかもしれないが、丸山氏は雄弁な方だ。とにかくお話が面白いので、インタビュー中は笑いが絶えなかつた。「孤高の作家」という強いイメージが覆い隠してきた、丸山氏のこういつた一面を、多くの方にお伝えできれば嬉しい。次回もご期待ください。(編集 白幡和美)



丸山先生宅の庭にて

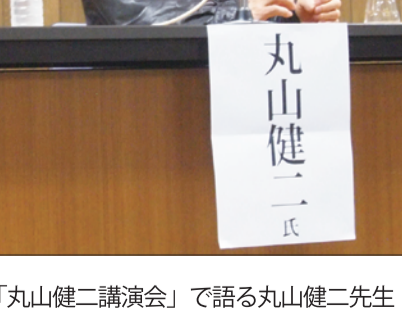
丸 兄貴の文章は非常に特徴的で、時に難解だと言われている。ご自身ではどうお考えですか。丸 いつも兄貴が言つてるんです。「お前の文章は一行見りや誰だつてわかるはずだ。ほかの野郎は一行だつてこんなこと書けねえ。見る人が見ればわかる。俺は兄貴のその言葉を生きがいにしているんです。」

丸 兄貴の文章は非常に特徴的で、時に難解だと言われている。ご自身ではどうお考えですか。丸 いつも兄貴が言つてるんです。「お前の文章は一行見りや誰だつてわかるはずだ。ほかの野郎は一行だつてこんなこと書けねえ。見る人が見ればわかる。俺は兄貴のその言葉を生きがいにしているんです。」

丸 兄貴の文章は非常に特徴的で、時に難解だと言われている。ご自身ではどうお考えですか。丸 いつも兄貴が言つてるんです。「お前の文章は一行見りや誰だつてわかるはずだ。ほかの野郎は一行だつてこんなこと書けねえ。見る人が見ればわかる。俺は兄貴のその言葉を生きがいにしているんです。」

丸 兄貴の文章は非常に特徴的で、時に難解だと言われている。ご自身ではどうお考えですか。丸 いつも兄貴が言つてるんです。「お前の文章は一行見りや誰だつてわかるはずだ。ほかの野郎は一行だつてこんなこと書けねえ。見る人が見ればわかる。俺は兄貴のその言葉を生きがいにしているんです。」

丸 兄貴の文章は非常に特徴的で、時に難解だと言われている。ご自身ではどうお考えですか。丸 いつも兄貴が言つてるんです。「お前の文章は一行見りや誰だつてわかるはずだ。ほかの野郎は一行だつてこんなこと書けねえ。見る人が見ればわかる。俺は兄貴のその言葉を生きがいにしているんです。」



「丸山健二講演会」で語る丸山健二先生

日本が世界に誇る作家 丸山健二

### 完本 丸山健二全集

【第六回配本】二〇一八年十二月十五日発売予定

## 『銀の兜の夜』(全三巻)

本体価格 各七〇〇円(税別)

海辺の小屋で暮らす親子四人。ある日、父親が漁網にかかった銀の兜を持ち帰る。それが壮大なドラマの幕開けた。銀の兜は時に指輪し、時に煽動し、時に懐柔しながら、次々と人々の本性を明らかにしていく。自由とは何か、を求めて苦悩する若者の物語。

13年ぶりの来札に、多くの文学ファンが来場!

### 「丸山健二講演会」で語られた文学の真髄

二〇一八年十月五日、札幌市で丸山健二氏の講演会を開催いたしました。演題は「真文学の夜明け」で、氏はじつに十三年ぶりの来札でした。

ご存知のとおり、丸山氏は二十三歳の若さで、『夏の流れ』という作品で芥川賞を受賞、文壇の寵児として華々しく登場しました。しかしその後、彼の反中央反権力、反文壇、反マスコミの姿勢が明らかになるにつれ、しだいに敬遠され、文壇の片隅に追いやられてしまったのです。

しかしそんなことは氏にとつて痛くも痒くもなく、凄まじい勢いで、鮮烈な文学作品を発表しつづけてきました。氏こそがわが国の文学界の最高峰に位置することは誰もが認めざるを得ないでしょう。

今回ご参加いただいた皆様、またお会いしましょう。(相贈舎代表 山本光伸)